



感染症の流行が心配です。なんといっても手洗いうがい、必要に応じてマスク着用にもご配慮ください。

使う言葉は気をつけようの、本当の意味

3学期を1カ月ほど過ごした子どもたち。学校としては最終学期となりますが、暦の上では「令和6年の始まり」の学期なので、なんだか大きな節目を迎えたような日々を送っています。1年生の教室をのぞいてみると、すでに「2年生」とか「お手本」という文字が見えます。そうか、もうすぐ“先輩”になるんだもんね。新1年生が入学してくるんだもんね。また、6年生の教室あたりでは、「卒業まであと〇〇日だねえ〜」という言葉も。カウントダウンカレンダーも。あ〜、もうすぐ卒業なんだね。

このような「言葉」が交わされると、なぜかその気になってしまう。「言葉」には、何かを伝えるだけではない、何かしら力があるような気がしてきます。

そんな折、たまたま夏目漱石に関する書籍などに目を通していた時、「肩こり」という言葉は夏目漱石が造り出した、という記事に出合いました。さらにその記事は、次のように続いていた。

日本の国民病といわれる「肩こり」。明治時代初期までは、そのような症状があることはなんとなく知っていたようですが、国民病とまではいかなかったようです。しかし、夏目漱石が1910年当時、かの有名な『門』を発表。次のような文章で、「肩こり」が表現されていたそうです。



「指で圧して見ると、頸と肩の継目の少し脊中へ寄った局部が、石の様に凝つてゐた」

この文章が新聞で発表されて以降、この「肩が凝る」という言い回しが広まったという。そしてなんと、当時の国語辞典の代表格であった『大言海』にも、この漱石の用法に倣い、「肩のこり」という表現を収録し、学術的にも日本語として定着したそうです。

言葉の創造を機に、国民病にまでなってしまった「肩こり」。言いにくいのですが、なんとも罪作りの造語だなあと思いつつ、やはり言葉の威力（魔力？）には驚かされる次第です。

待てよ、そうするとネガティブな言葉は、ネガティブな状況や人となりを作ってしまうこともある、ということではないか。確かに、「今日は調子がよくないなあ」とか「頭が痛いなあ」など、ネガティブな言葉を発してしまった日は、そうなることが多いという実感があります。逆に、ちょっとくらい調子がよくなくても、「今日は元気」と言葉で自身を元気づけることで、本当に元気になった経験もある。「だり〜（だるい）」とか「きち〜（きつい）」に限らず、「死ね」「ぼけ」などのネガティブな言葉は、使っちゃいけないんだなあ、と改めて思います。とともに、学校という場所は、豊かな言葉が行きかう学習環境であるべきだと、再確認。だから、「お手本」とか「みんなのために」「さすが」などのポジティブな言葉を随所で使いながら、自分自身を成長させていけるような楡木っ子を目指したいものだと思います。